黒ウサギとヴァンパイアも異世界から来るそうですよ？

天・プラ子

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大兎とヒメアの元に一通の手紙が届いた。其処に書かれていたのは

〝悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。その才能《ギフト》を試すこ　とを望むならば、己の家族を、友人　を、財産を、世界の全てを捨て、我らの〝箱庭〟に来られたし〟

それを呼んだ途端開かれる視界。其処はなんと異世界だった。

『ｙｅｓ！黒ウサギが呼びました』

今ここで大兎とヒメアの新たな戦いが始まったのだ

目　次

ＹＥＳ！黒ウサギが呼びました！
黒ウサギが黒ウサギと会うそうですよ？ ―――― 1
苦労さぎは黒ウサギに説明するそうですよ？ ―――― 10
ギフトゲーム申込み ―――― 21

ＹＥＳ！黒ウサギが呼びました！
黒ウサギが黒ウサギと会うそうですよ?

場所は宮坂高校生徒会室

そこに二人の男女がいた。

一人は、茶髪の顔はまぁまぁいい、何処にでもいそうな男子。

名前は鉄大兎。彼は普通の人間ではない。小さい頃、サイトヒメアという少女に毒《まじゅつ》を入れられ、１５分間に七回死なないと死ねなくなったの男子。他にも『軍』という組織に対『神の外側の神』用に天魔の解造対を移植され、一度は暴走したもののなんとか理性を取り戻し、神をも殺す力を得た。

つまり凄く強い（小並感）

もう一人の女性は、赤のプリーツスカートにセーラー服という、そこそこの見た目の女の子でもかわいく見えてしまうような、近所の学生たちにも評判のいい宮坂高校の制服が、あまり似合っていない少女。いや、制服の方があきらかに見劣りしてしまっているほどだ。

日本人ではありえない、というよりも、普通の人間にはありえない、薄桃色?の長い

髪。毛穴一つ無い無い真っ白な肌。ツンと高い鼻。つり気味の深紅の瞳。誰もが息を呑むほどの美少女、それ　がサイトヒメアだ。

つまり凄く可愛い（小並感）

二人は一つの封筒と睨めっこしていた

「ヒメア、これどう思う?」

「魔力を感じるし、何かあるんじゃないかな」

「やっぱそうだよな～。月光達が来てから開けてみようか」

「別に待たなくてもいいじゃん。ここにいないあいつ等が悪いんだし、開けちゃおうよ」

「それもそうだな。やること無かったし丁度いいか。じゃあ開けるぞ・・・・」

「うん」

大兎は封筒を開けて中の文字を読んだ

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。その才能《ギフト》を試すこ　とを望むならば、己の家族を、友人　を、財産を、世界の全てを捨て、我らの〝箱庭〟に来られたし』

大兎がそれを読んだ瞬間、大兎とヒメアの視界が開けた

いきなり転移させられ二人は上空４０００ｍほどに放り出された。そして重力に従い落下していった。他にも三人ほど大兎達と同様転位させられたのか、同じように落下していた

「わっ!?」
「きゃっ!」
「うおっ!」
「う、うおおおおおおおおおし、死ぬ!まじで死ぬ!」
「……」
!?!?!?!?!?
一人馬鹿みたいに叫んでいる奴がいるが他の三人は落下に伴う圧力に苦しみながらも同様の感想を抱き、同じ言葉を発した
「「ど、何処だここ…」」

＊＊＊＊＊

ドボーン

４つの水飛沫がとんだ。
たった一人、ヒメアだけは空を飛んで湖の中に落ちるのを避けていた
「大丈夫?大兎」
そうヒメアが聞くと大兎が出てきて

「大丈夫だよ。」
と苦笑しながら言った。
どうやら何か膜の様なものが衝撃を緩和してくれたようだ
そんな些細な会話をしていると他の3人も湖から出てきたようだ
「し、信じられないわ！まさか問答無用で引き摺り込んだ挙句、空に放り出すなんて！」
「右に同じだクソッタレ　。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」
「……。いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう？」
「俺は問題ない」
「そう。身勝手ね」
2人はフンと鼻をならして服を絞り始めた。
もう1人、2人と同じように湖から出てきた、猫を抱えた少女が服を絞りながら呟いた
「此処……　どこだろう？」
「さあな。まあ、世界の果てっぽいものが見えたし、どこぞの大亀の背中じゃねえか？」
「ほんと何処なんだろうな。ヒメアわかるか？」
大兎は腕にしがみ付いているヒ　メアに聞くと、ヒメアは顔を下げ、ちょっと悩む素

振りを見せるが、何処も思い浮かばなかったのか直ぐ顔をあげ応えた
「う〜ん、私ここには来たことないと思うよ」
「ヒメアでも知らないところなんだ。じゃあここから帰る魔法とか作れる?」
「時間軸とかも違うから時間は掛かると思うけど作れるよ」
「じゃあお願いしてもいい」
「わかった。ちょっと待っててね」
　ヒメアはそう言って笑顔を見せると魔術を構築しはじめた
　と、そこで服を絞り終えた男が話し始めた
「まず間違いないだろうけど、一応確認し　とくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が?」
「そうだけど、まずはその〝オマエ〟って呼び方を訂正して。――――――私は久遠飛鳥よ。以後気をつけて。それで、そこの猫を抱きかかえている貴女は?」
「……　春日部耀。以下同文」
「そう。よろしく春日部さん。次に、野蛮で凶暴そうなそこの貴方は?」
「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快楽主義と三拍子そろった駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」

「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」
「ハハ、マジかよ。今度作っ　とくから覚悟しとけ、お嬢様」
「で、最後にそこの仲のよさそうな二人は？」
「俺は鉄大兎。んでこっちがサイトヒメア。よろしく」
「ええ。よろしく大兎君、ヒメアさん」
「で、呼び出されたはいいけどなんで誰もいねぇんだよ。この状況だと招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねぇのか？」
「ええ、そうよね。なんの説明もないままじゃ動きようがないもの」
「はぁ、仕方ねぇ。其処に隠れているやつに聞くか」
「あら、貴方も気付いていたの？」
「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ。其処の3人も気付いていたみたいだけどな」
「風上に立たれたら嫌でもわかる　」
「気配はあったし、耳が見えてたからな」
「……」
「へ～、面白いなお前ら。……ほら、わかってんだろ。出てこいよ」
　そう十六夜が言うと茂みの方から声が聞こえた
「やだな～、そんな怖い顔で見られると黒うさぎは死んじゃいますよ？ええ、ええ。古来

から孤独と狼はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一つ穏便に御話を聞いていただけたら嬉しいですヨ?」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「ヒメア、出来た?」

「あとちょっとで出来るから待っててね」

「あっは、取りつく島も無いですね♪ってか、最後の御二方!チョットは黒ウサギに興味を持ってください!」

「え?ああごめん」

「ねぇ、大兎ギューしよ!ギュー!」

「ちょっ、ヒメア!?ギューは今ダメだから!知らない人いっぱいいるから!」

「関係無いもん」

「もんって。後でしてあげるから」

「絶対?」

「うん、絶対」

「絶対の絶対?」

「絶対の絶対だから！」
「わかった。じゃあ我慢する」
「黒ウサギの話を聞いて下さい！」
「えい」
「フギャ！」
　大兎とヒメアのやりとりに黒ウサギが吠えると、春日部がいきなり黒ウサギのうさ耳を力一杯引っ張った
「ちょ、ちょっとお待ちを！触るまでなら黙って受け入れますが、まさか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どういう了見ですか!?」
「好奇心の為せる技」
「自由にも程があります！」
「へぇ？このうさ耳って本物なのか？」
　そう言って十六夜が黒ウサギのうさ耳を鷲掴みする
「……。じゃあ私も」
　そう言って飛鳥も十六夜と反対側の耳を鷲掴みにする。
「ちょっと、離してください！」
　黒ウサギは助けを求めるべく大兎とヒメアに目線を向けるが……

「ねねねね、大兎大兎！大兎もああ言うのが付いてた方がいいのかな?」
「え?ああ。別に可愛いとは思うけど、ヒメアは今のままでいいよ」
　ラブコメっていた
「だからちょっとは興味を持ってください！」
「「えい」」
　十六夜と飛鳥が同時に黒ウサギの耳を引っ張られた黒ウサギは、言葉にならない悲鳴を上げた

苦労さぎは黒ウサギに説明するそうですよ？

「あ、あり得ない。あり得ないのですよ。まさか話を聞いてもらうために小一時間も消費してしまうとは。学級崩壊とはきっとこのような状況に、違いないのデス」
「いいからさっさと進めろ」
　あまりの理不尽に黒ウサギもすでに半泣きであるが、なんとか気を取り直し咳払いをすると、両手を広げ話し始めた
「それではいいですか、皆様。定例文で言いますよ？言いますよ？さあ、言います！ようこそ、〝箱庭の世界〟へ！我々は皆様にギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただこうかと召喚いたしました！」
「なんかあれみたいだな。１００万円贈呈しますとか言ってくる詐欺メール」
「違います！」
　と、大兎のセリフにすぐに突っ込む黒ウサギ
「ギフトゲーム？」
「そうです！既に気づいていらっしゃるでしょうが、皆様は普通の人間ではございません！」

『普通の人間』と言う言葉に大兎が反応する
「普通の人間。俺って今何者なんだろうな。やっぱ化け物?」
　その言葉にヒメアは優しい笑顔を見せると
「……大兎は、大兎だよ」
　なんて言ってくる。それに大兎は笑顔を返し
「ありがとな、ヒメア」
　そんな会話をしている時にも話は進む
「そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ!」
「貴女の言う〝我々〟とは貴女を含めた誰かなの?」
「ＹＥＳ!異世界から呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって、数多とある〝コミュニティ〟に必ず属していただきます♪」
「嫌だね」
「属していただきます!そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの〝主催者《ホスト》〟が提示した賞品をゲットできるというとってもシンプルな構造となっております」
「……〝主催者〟って誰?」
「様々ですね。暇を持て余した修羅神仏が人を試すための試練と称して開催されるゲー

ムもあれば、コミュニティの力を誇示するために独自開催するグループもございます。特徴として、前者は自由参加が多いですが〝主催者〟が修羅神仏なだけあって凶悪かつ難解なものが多く、命の危険もあるでしょう。しかし、見返りは大きいです。〝主催者〟次第ですが、新たな〝恩恵《ギフト》〟を手にすることも夢ではありません。後者は参加のためにチップを用意する必要があります。参加者が敗退すればそれらはすべて〝主催者〟のコミュニティに寄贈されるシステムです」

「チップには何を？」

「それも様々ですね。金品・土地・利権・名誉・人間……そしてギフトを賭けあうことも可能です。新たな才能を他人から奪えばより高度なギフトゲームに挑む事も可能でしょう。ただし、ギフトを賭けた戦いに負ければ当然――ご自身の才能も失われるのであしからず」

黒ウサギの愛嬌たっぷりの笑顔に挑発の色が出始める。それに飛鳥が挑発的な声音で問う

「そう。なら最後にもう一つだけ質問させてもらってもいいかしら？」

「どうぞどうぞ♪」

「ゲームそのものはどうやったら始められるの？」

「コミュニティ同士のゲームを除けば、それぞれ期日内に登録していただければＯＫ！

商店街でも商店が小規模のゲームを開催しているのでよかったら参加していってくださいな」

「……つまり『ギフトゲーム』とはこの世界の法そのもの、と考えてもいいのかしら?」

飛鳥の発言に、お?　と驚く黒ウサギ

「ふふん?中々鋭いですね。しかしそれは八割正解の二割間違いです。我々の世界でも強盗や窃盗は禁止ですし、金品による物々交換も存在します。ギフトを用いた犯罪などもってのほか!そんな不逞な輩は悉く処罰します――――が、しかし!『ギフトゲーム』の本質は全く逆!一方の勝者だけが全てを手にするシステムです。店頭に置かれている商品も、店側が提示したゲームをクリアすればタダで手にする事も可能だということですね」

「そう。中々野蛮ね」

「ごもっとも。しかし、〝主催者〟は全て自己責任でゲームを開催しております。つまり奪われるのが嫌な腰抜けは初めからゲームに参加しなければいいだけの話でございます」

一通り話し終えた黒ウサギが一息つきまた話し始めた

「さて。皆さんの召喚を依頼した黒ウサギには、箱庭の世界における全ての質問に答える義務がございます。が、それら全てを語るには少々お時間がかかるでしょう。新たな

同士候補である皆さんを何時までも野外に出しておくのは忍びない。ここから先は我らのコミュニティでお話しさせていただきたいのですが……よろしいです？」
「いや、俺らは遠慮しとく」
「へ？」
　断りをいれた大兎に驚きの声を出してしまう黒ウサギ
「俺とヒメアはもうそろそろ帰るから」
「ええっ！」
　まさかの発言にさらに驚く黒ウサギ
「ヒメア出来た？」
「うん。できてるよ」
「じゃあ俺らは帰ろっか」
　そう言ってどうやって帰るかわからないが、帰ろうとする大兎達を止めようする黒ウサギ
「ちょ、ちょっとまってくださいな！え？帰るってどうやって帰るんですか!?」
「どうやってって、ヒメアに転移魔法を構築してもらって帰るだけだけど」
「転移魔法って、そんな高度は魔法をつかえるんですか!?って違います。で、でも、う、う～…。本当に帰ってしまうんですか？」

「ん?帰ったらマズイのか?」
　今黒ウサギのコミュニティの状況を考えると1人でも多く戦力が欲しい。さらに転移魔法と言う高度な魔法を使えるのだ。なんとしても自分のコミュニティに入って欲しい。が、箱庭で暮らすのは強制ではない。なので無理に止めるのもおかしい。色々と黒ウサギが葛藤していると今まで黙っていた十六夜が口を挟んだ
「まあまぁ、ちょっと帰るのは待とうぜ。黒ウサギも全部話したわけじゃなさそうだしな」
　その言葉に飛鳥が反応する
「それはどう言う事なの」
「それは黒ウサギに聞こうぜ。なぜ俺たちを呼んだのか、とか」
　少し悩んだ黒ウサギは話し始めた
「……わかりました。全て話します。大兎さんとヒメアさんも聞いていただけませんか?」
「俺は別にいいよ。ヒメアはどうする?」
「大兎がいいのなら私はいいよ」
「って事で俺たちもいいよ」
「ありがとうございます。まず十六夜さんの言う、何故皆様を呼んだかですが、数年前ま

で私たち、黒ウサギが所属しているコミュニティは東区画最大手でした。しかしある時、この世界の最悪の天災と呼ばれる〝魔王〟によって〝名〟それに〝旗印〟さらには中核を成す〝仲間〟を奪われました」

「魔王!?なんだよそれ、魔王って超カッコイイじゃねぇか!箱庭には魔王なんて素敵ネーミングで呼ばれる奴がいるのか!?」

「え、ええまあ。けど十六夜さんが思い描いている魔王とは差異があると……」

「そうなのか?けど魔王なんて名乗るんだから強大で凶悪で、全力で叩き潰しても誰からも咎められることの無いような素敵に不敵にゲスい奴なんだろ?」

「ま、まあ……倒したら多方面から感謝される可能性はございます。倒せば条件次第で隷属させることも可能ですし」

「へえ?」

「魔王は〝主催者権限《ホストマスター》〟という箱庭における特権階級を持つ修羅神仏で、彼らにギフトゲームを挑まれたが最後、誰も断ることはできません。私達は〝主催者権限〟を持つ魔王のゲームに強制参加させられ、コミュニティは……コミュニティとして活動していく為に必要な全てを奪われてしまいました」

黒ウサギの話しに飛鳥が確認する

「なるほどね。だいたい理解したわ。つまり〝魔王〟というのはこの世界で特権階級を

振り回す神様ｅｔｃ．を指し、黒ウサギのコミュニティは彼らの玩具として潰された。そういうこと?」
「そうでございます」
「新しくコミュニティってのを作るのはダメなのか?」
　と大兎が聞くと黒ウサギの顔が悲しげに歪んだ
「不可能ではありません……。しかし!改名はコミュニティの完全解散を意味します。しかしそれではダメなのです!私達は何よりも……仲間達が帰ってくる場所を守りたいのですから……」
『仲間達が帰ってくる場所を守りたい』それは黒ウサギの掛け替えの無い本心からの言葉だった。
「ヒメア。月光達には悪いけど、ちょっとだけここに残るわ」
「そっか…。やっぱり大兎は優しいね」
「本当ですか!ありがとうございます!」
「あ、俺とヒメアはいいけど他の3人は知らないぞ?」
「そ、そうですよね。あの皆様、どうか私共のコミュニティに入っていただけないでしょうか。お願いいたします!」
「俺はいいぞ。面白そうだしな。魔王に奪われたものを取り戻すなんて滅多に出来るも

んじゃないしな」
「私も構わないわ」
「……私も。もともと友達を作りに来ただけだから」
「あら、そうなの？じゃあ私が立候補していいかしら」
「うん。飛鳥は他の人とは違う気がするから多分大丈夫」
「皆様！ありがとうございます！では早速私たちのコミュニティに案内するので付いてきてください！」
ご機嫌そうな黒ウサギがそう言うと歩き出した

♪♪♪

「ジン坊ちゃーん！新しい方を連れてきましたよー！」
「おかえり黒ウサギ。そちらの４人が？」
「はいな、こちらの５名様が――――――」
後ろを振り返り固まる黒ウサギ
「……え、あれ？もう一人いませんでしたっけ？ちょっと目つきが悪くて、かなり口が悪くて、全身から〝俺問題児！〟ってオーラを放っている殿方が」

「ああ、十六夜君のこと?彼なら〝ちょっと世界の果てを見てくるぜ!〟と言って駆け出して行ったわ。あっちの方に」

飛鳥が指さしたのは、上空４０００ｍから見えた断崖絶壁だった

「な、なんで止めてくれなかったんですか!」

「〝止めてくれるなよ〟と言われたもの」

「ならどうして黒ウサギに教えてくれなかったのですか!?」

「〝黒ウサギには言うなよ〟と言われたから」

「嘘です、絶対嘘です!実は面倒くさかっただけでしょう御二人さん!」

「うん」」

「大兎さんとヒメアさんはなんで止めてくれなかったんですか!」

「いや、止める前に跳んでったし」

「私は興味ないし」

ガクリ、と項垂れる黒ウサギ

そんな黒ウサギとは対照的に、ジンと呼ばれた少年は蒼白になって叫んだ。

「た、大変です!〝世界の果て〟にはギフトゲームのために野放しにされている幻獣が」

「幻獣?」

「は、はい。ギフトを持った獣を指す言葉で、特に〝世界の果て〟付近には強力なギフト

を持ったものがいます。出くわせば最後、とても人間では太刀打ち出来ません！」
「あら、それは残念。もう彼はゲームオーバー？」
「ゲーム参加前にゲームオーバー？……斬新？」
「冗談を言ってる場合じゃありません！」
「一刻程で戻って来ます。ジン坊ちゃんは四人様のご案内をよろしくお願いします」
　そう言うと黒ウザギの髪が緋色に染まり、物凄いスピードで跳躍した。
「箱庭のウサギは随分高く跳べるのね。素直に感心するわ。で、エスコートはあなたがしてくれるのかしら？」
「え、あ、はい。コミュニティのリーダーをしているジン＝ラッセルです。齢十一になったばかりの若輩ですがよろしくお願いします」
「そう。ではジンくん、箱庭を案内をお願いしてもよろしいかしら？」
「はい！」
　そう言って飛鳥はジンの手を取り歩いて行った。その後ろを大兎達は付いていくのであった

ギフトゲーム申込み

箱庭二一〇五三八〇外門・内壁

ジンに連れられ４人は箱庭の幕下に足を踏み入れた。そこでは天幕の中に入ったにもかかわらず太陽の眩しい光が廻りを照らしていた。

『お、お嬢！外から天幕の中に入ったはずなのに、お天道様が見えとるで！』

「……本当だ。外から見た時は箱庭の内側なんて見えなかったのに」

「全面ガラス張りみたいな感じだな」

「箱庭を覆う天幕は内側に入ると不可視になるんですよ。そもそもあの天幕は太陽の光を直接受けられない種族の為に設置されていますから」

と、ジンが説明してくれた

「まるで、吸血鬼がここで住んでいるような言い方ね」

「はい。いますよ」

「……そう」

ジンのなんでもないような返事に何とも言えない複雑そうな顔をする飛鳥。

そういえば・・・

「今更だけどヒメアって太陽光とか大丈夫なの？」
「うん。だいじょうぶだよ。」
「え？ヒメアさんって吸血鬼なの？」
　飛鳥が大兎とヒメアの会話を聞いていたのか、そんな質問をしてくる
「ん？ああ、確かヴァンパイアとか言ったかな」
　大兎が答えに飛鳥と耀は心底驚いた表情をしていた
「まさかこんな近くに吸血鬼がいるとは思わなかったわ」
　なんて飛鳥が言う。耀もコクコクうなずいている。
「この世界には他にも様々な種族が暮らしています。これからいろんな出会いもあると思います。危険もありますがきっといい出会いもあると思いますよ」
「そう。それは楽しみね」
『お嬢の友達も増えるといいな』
「うん」
　二人の反応にジンも満足そうだ
　そんな会話をしていると噴水があるところまで来ていた。周りにはカフェテラスなどがあり猫耳を付けたウェイトレスなどがいた。
「小腹がすいてきたな」

「じゃあ一緒にコロッケパン食べよ！」
　ヒメアはそういいながらコロッケパンを差し出してきた。
「ヒメア？なんでコロッケパンもってるんだ？」
「大兎と一緒に食べたかったから。はい、あーんして。食べさしてあげる」
「ちょ、ヒメア！タンマ、タンマ！みんな見てるから！」
「でもお腹すいたでしょ？」
「確かにすいたけど、また後で一緒に食べよ。な？」
「うーん。わかった。約束だよ」
「ああ。ジン、何処かで飯が食えるところはないか」
　大兎が言うと周りも同意の胸を示すように頷いた
「そうですね、すべて黒ウサギに任せていたので…なので好きな店を選んでもらっていいですよ」
「そう、気前がいいのね。では、あちらにしましょうか。」
　どうやら店は決まったようだ。店が決まったところでぞろぞろと歩き出し、ウェイトレスに案内され席に着いた。
「適当に私が頼んでも大丈夫かしら？」
「ああ、食べ物さえあれば大丈夫。ヒメアもそれでいい？」

「大兎と同じがいいな」
「じゃあ、同じの二つで頼むわ」
「ふふ。仲がいいのね」
飛鳥が微笑みながらいいてっくる。
そして他の人の了承を得て飛鳥は注文を始める
「えーと、紅茶を二つと緑茶を一つ。あと軽食にコレとコレと。それとこのセットを2つ」
『ネコマンマを!』
「はいはーい。ティーセット三つに、ランチセット2つ。それとネコマンマですね」
注文の繰り返しを聞いていた大兎、飛鳥、ジンが驚いた顔をする。そして何より一番驚いていたのは耀だった
「三毛猫の言葉、わかるの?」
「そりゃ分かりますよー。私は猫族なんですから。お歳の割に随分と綺麗な毛並みの旦那さんですし、ここはちょっぴりサービスもさせてもらいますよー」
『ねーちゃんも可愛い猫耳に鉤尻尾やな。今度機会があったら甘噛みしに行くわ』
「やだもーお客さんったらお上手なんだから♪」
猫耳娘は長い鉤尻尾をフリフリと揺らしながら店内に戻る。

その後ろ姿を見送った耀は嬉しそうに笑って三毛猫を撫でた。
「……箱庭って凄いね、三毛猫。私以外に三毛猫の言葉が分かる人がいたよ」
『来てよかったなお嬢』
「ちょ、ちょっと待って。貴女もしかして猫と会話出来るの？」
耀はその質問にコクリと頷く
「ほえ～やっぱり黒ウサギが言ってた通りみんな普通じゃないんだな」
「そういうあなたも普通の人間じゃないんでしょ？いったいどんな力をも――」
「おんやぁ？誰かと思えば東区画の最底辺コミュ〝名無しの権兵衛〟のリーダー、ジン君じゃないですか。今日はオモリ役の黒ウサギは一緒じゃないんですか？」
飛鳥の話している横から２ｍ程のぴちぴちのタキシードを着た変な男がいた
「僕らのコミュニティは〝ノーネーム〟です。〝フォレス・ガロ〟のガルド＝ガスパー」
「黙れ、この名無しめ。聞けば新しい人材を呼び寄せたらしいじゃないか。コミュニティの誇りである名と旗印を奪われてよくも未練がましくコミュニティを存続させるなど出来たものだ――そう思わないかい、皆様」
「失礼でですけど、同席をを求めるならばまずは氏名を名乗ったのちに一言添えるのが礼儀ではないかしら？」
「おっと失礼。私は箱庭上層に陣取るコミュニティ，六百六十六の獣，の傘下である」

「烏合の衆」
「コミュニティのリーダーをしている、ってマテやゴラァ!!誰が烏合の衆だ小僧オォ!!」
ジンに横槍をいれられたガルドの顔は怒鳴り声とともに変貌する。口は耳元まで大きくさけ、肉食獣のような牙とギョロリト剥かれた瞳が激しい怒りとともにジンに向けられる
「口を慎めや小僧ォ……紳士で通っている俺にも聞きのがせねぇ言葉はあるんだぜ……？」
「森の守護者だった頃のあなたなら相応に礼儀で返していたでしょうが、今の貴方はこの二一〇五三八〇外門付近を荒らす獣にしか見えません」
「ハッ、そういう貴様は過去の栄華に縋る亡霊と変わらんだろうがッ。自分のコミュニティが、どういう状況に置かれているのか理解できてんのかい？」
その言葉にジンは苦い顔をする
「もしかしなくとも、皆様はジン君のコミュニティが現在どんな状況か聞いていないのでは？」
ガルドが自信満々に聞いてくる。
ジンの方は困惑した顔で俯いていた。
だが帰ってきたのは二人の予想していなかった答えだった

「きいてるわよ?」
「ああ、黒ウサギが話してくれたな」
「うん」
二人はまさかの返答に開いた口がふさがらない。
しかし、ガルドはいち早く気を取り直し提案をもちかけた
「そ、それなら話が早い。こんな崖っぷちのコミュニティではなく、黒うさぎ共々私のコミュニティに来ませんか?」
そのセリフにジンは焦りの表情話見せる
「な、何を言い出すんですガルド＝ガスパー!?」
ジン＝ラッセルは怒りのあまりテーブルを叩いて抗議する。
しかしガルド＝ガスパーあ獰猛な瞳でジンを睨み返す。
「黙れ、ジン＝ラッセル。そもそもテメェが名と旗印を新しく改めていれば最低限の人材はコミュニティに残っていたはずだろうが。それを貴様の我儘でコミュニティを追い込んでおきながら、どの顔で異世界から人材を呼び出した」
「そ……それは」
「何も知らない相手なら騙しとおせるとでも思ったのか?まぁ実際すぐにばれていたみたいだが。それで黒うさぎと同じ苦労を背負わせるってんなら……こっちも箱庭の住

人として通さなきゃならねぇ仁義があるぜ」
ガルドがいう事は正しかった。確かに多数を優先し名前を変え、旗印を新しくしていれば今の様な状況にはならなかった。
それでもあきらめたくない気持ちがジンにはあった。
だが、今回の件に関して言えば言い返したい言葉はあるが、大兎達を騙そうとしていたことは事実であり、その事実がジンの胸の中で濁り言葉を発せなかった。
「……で、どうですか皆様。返事はすぐにとは言いません。コミュニティに属さずとも貴方達には箱庭で三十日間の自由が約束されています。一度、自分達を呼び出したコミュニティと私達〝フォレス・ガロ〟のコミュニティを視察し、十分に検討してから――――」
「結構よ。だってジン君のコミュニティで私は間に合っているもの」
は？とジンとガルドは飛鳥の顔を窺う。
「春日部さんは今の話をどう思う？」
「別に、どっちでも。最初に言った通り私はこの世界に友達を作りに来ただけだもの」
「では、大兎君とヒメアさんはどうかしら」
「ん？俺は黒うさぎの手伝いをするために残った様なもんだから。ヒメアもそれでいい？」

「私は大兎がいれば何でもいいよ」
「という事よ。わかったかしら？」
「お……お言葉ですが――――」
「〝黙りなさい〟」
ガチン！とガルドは不自然な形で、勢いよく口を閉じて黙り込んだ。
本人は混乱したように口を開閉させようともがいているが、まったく声が出ない。
「……！？……！？？」
「私の話はまだ終わってないわ。貴方からはまだまだ聞き出さなければいけないことがあるのだもの。〝貴方はそこに座って、私の質問に答え続けなさい〟」
そこからは色々な話を聞き出した。
女子供をさらって脅迫。
ゲームを受けなければいけない状況まで追い込む。
さらった子供は殺した。
子供を殺したことを聞いた時その場の空気が凍りついた。
流石に飛鳥も聞くにたてられなかったのだろう。話の途中で命令を下し話を中断させた。
「……素晴らしいわ。ここまで絵にかいたような外道とはそうそう出会えなくてよ。流

石は人外魔境の箱庭といった所かしら……ねぇジン君？」

飛鳥の冷ややかな視線に慌てて否定する

「彼のような悪党は箱庭でもそうそういません」

「そう？それはそれで残念。――――ところで、今の証言で箱庭の法がこの外道を裁くことはできるのかしら？」

「厳しいです。吸収したコミュニティから人質をとったり、身内の仲間を殺すのはもちろん違法ですが……裁かれるまでに彼が箱庭の外に逃げ出してしまえば、それまでです」

「そう。ならしかたないわね」

飛鳥は苛立たしげに指をパチンと鳴らす。俺が合図だったようで、ガルドの拘束が解け自由になる。怒り狂ったガルドはカフェテラスのテーブルを勢いよく砕くと、

「こ……この小娘がァァァァァァァァ!!」

雄叫びとともにガルドの体が激変する。タキシードは膨張する後背筋ではじけ飛び、体毛は変色し黒と黄色のストライプ模様になった

「てめぇ、どういうつもか知らねぇが……俺の上に誰がいるかわかってんだろうなァ!?箱庭第六六六外門を守る魔王が俺の後見人だぞ!!俺に喧嘩売るってことはその魔王にも喧嘩を売るってことだ！その意味が

「〝黙りなさい〟。私の話はまだ終わってないわ」
ガチン、とまた勢いよく黙るしかし今の怒りはそれだけでは収まらない。ガルドは丸太のように太い剛腕を振り上げ飛鳥に襲いかかる。そしてその腕が飛鳥を吹き飛ばす
ガシッ！
前に大兎が飛鳥とガルドの間に割って入りその腕を止めた。
ガルドは、止められたことに驚きを隠せないが、それでももう片方の腕で追撃を図るために腕を振りかぶる。
「アルト」
ヒメアがそう言うと、ガルド動くは完全に止まる。
「私の大兎に手を出さないで。……ころすよ」
と、ヒメアが言う。
底冷えするような目をガルドに向けながら言う。
ガルドはヒメアに睨まれ息が詰まる。
「さて、ガルドさん」
と、飛鳥が話を切り出す
「わたしは貴方の上に誰がいようと気にしません。それはきっとジン君も同じでしょう。だって彼の最終目標は、コミュニティを潰した〝打倒魔王〟だもの」

その言葉でジンは大きく息を呑むが。自分たちの最終目標を飛鳥に問われ、我に返る。

「……はい。僕達の最終目標は、魔王を倒して僕らの誇りと仲間達を取り戻すこと。今更そんな脅しに屈しません」

「そういうこと。つまり貴方には破滅以外のどんな道も残されていないのよ」

「く……くそ…!」

ヒメアの力で動くことができないガルドは苦渋の声を漏らす

飛鳥はガルドに悪戯っぽい笑顔で話しかける

「だけど、私は貴方のコミュニティが瓦解するだけじゃ満足できないの。そこで提案なのだけれど」

そこで飛鳥は今日一の笑顔で

「私達と『ギフトゲーム』をしましょう。貴方の〝フォレス・ガロ〟存続と〝ノーネーム〟の誇りと魂をかけて」

と言い放った